

相撲協会と政治家の「深い癒着」

国技とされる相撲は、神話にそのルーツがあるといわれ、古事記や日本書紀にもその萌芽をみとれる。現在の奉納土俵入りを見てわかる通り、「神事」として行われてきた相撲は、常に権力者による庇護の下にあった。古くは奈良時代頃から宮中相撲が行われ、中世になると鎌倉幕府が武家に相撲を奨励した。江戸時代になって

もその名残は続き、百五十年前の「維新」では、明治天皇が相撲を好んだことで生き残ることができた。そして今も、相撲と権力者は切り離すことができない。昨年十一月に発覚した「日馬富士暴行事件」に端を発した日本相撲協会の騒動は、二月二日の理事選が終わってもその余波が続く。平昌オリンピックの陰に隠れたものの、八角理事長を筆頭とする協会主流派と、貴乃花親方グループの確執は残っ

ており、三月の大阪場所が近づくとつれて再び蒸し返されそう。実はこの騒動の背後にも、一人の「政治家」の姿が見え隠れする。自民党に代表される与党議員との密接な関係のせいで、実は協会の健全化が遠ざかっている。

八角のバックに「鈴木宗男」

暴行事件が浮上した後の昨年十一月二十九日、超党派の「大相撲の発展を求める議員連盟」が衆議院第一議員会館で緊急会合を開いた。出席議員からは日馬富士の引退表明に疑問を呈する声上がり、関係者への聞き取り調査を行うことで一致した。政治が主導してメスを入れるかのようなが、さにあらず。「議連は騒動を脇から眺めて感想を言ったに過ぎない」（全国紙記者）。理事選が終わった二月七日にも会合を開いているが、そこでも大した意見が出たわけ

を支援。しかし、鈴木は自身の選挙区出身の保志に徐々に重点を移した。この間、九重部屋の有力タニマチとなりバックアップしたのが、大阪の食肉卸大手ハンナンの創業者である浅田満だ。農林族議員である鈴木に食い込むために、九重部屋を強力に支援。同部屋の大阪場所の宿舎はハンナンが用意した。なぜか保志（北勝海）は大阪場所でも強く、全八回の優勝のうち五回を大阪で上げているのだ。

このつながりは今日に至っても強固で、八角部屋の後援会長は鈴木が務める。一六年十一月に都内のホテルで行われた鈴木長女、貴子の結婚式には八角親方が出席した。当然、ハンナンからの支援も続いており、八角が理事長になった一五年の選挙などでも陰に陽に

はない。相撲協会の関係者が語る。「この議員連盟は八百長問題をきっかけにできたもの。協会を公益法人にするための支援をしてもらった」

野球賭博問題をきっかけに八百長相撲の事実が噴出したのは二〇一一年春のこと。当時、協会にとって喫緊の問題は、公益法人改革の一環として新たに導入された「公益財団法人」の指定を受けることだった。タイムリミットは一三年十一月に迫っており、指定が受けられなければ法人税減免という生命線が失ってしまう。当時の監督官庁である文部科学省は八百長問題をきっかけに公益法人化に慎重な姿勢を示していた。そこで発足したのが現在の議連の前身となる団体だ。自民党を中心として約七十人の議員が集まったが、名称は「大相撲の早期正常化と更なる発展を求める議員連盟」だった。

支援をしたとみられる。今回の騒動で、多くのテレビ局などが貴乃花サイドに肩入れする中、鈴木は常に八角親方の側に寄り添い続けた。前出相撲協会関係者が語る。「議員連盟より鈴木氏による政界への働きかけの方がよほど力になった」

「持ちつ持たれつ」の関係
与党の一角を占める公明党との関係はどうか。神道とつながる相

「ようするに八百長問題を早期幕引きすることを支援するために立ち上げられた」

当時を知る自民党関係者はこう語る。文科省への度重なる議連の要求の成果か、期限から遅れること二カ月、一四年一月に辛うじて公益法人の認定を受けると、その後議連は現在の名称に変わった。ではなぜ自民党の議員らはこれほど大相撲を擁護するのか。

「選挙区出身力士の応援や、巡業への参加は一番の集票活動」
全国紙政治部記者はこう語る。

地元出身の力士の後援会には、地元企業経営者など有力者が集まる。また、巡業は神社のお祭りのようなもので、有権者に顔を広める選挙活動なのだ。

有名などころでは、自民党の参院議員、中曽根弘文が三十年近く佐渡ヶ嶽部屋を支援している。また、福岡県出身の大関琴奨菊の六年の結婚披露宴では、いまだに永田町で存在感を発揮する自民党の長老、古賀誠が仲人を務めた。「地元企業にとって議員が応援する相撲取りのタニマチになることは、『第二の献金』のようなもの」

撲ゆえに、公明党の支持母体である創価学会からは疎まれる存在かと思いきや、実は創価学会員の力士は意外という。どうやって宗教的な折り合いをつけているかは判然としませんが、有名などころでは反貴乃花として名を馳せた尾車親方は学会員だ。「選挙の際には部屋で揃って期日前投票に行く（関係者）というから公明党も相撲協会をむげにはできないようだ。一六年二月、都内のホテルで開かれた境川部屋の幕内力士、豊響の結婚披露宴には、首相夫人である安倍昭恵が出席し、スピーチを行っている。昭恵は安倍の選挙区である山口県下関市出身の豊響の地元後援会名誉会長を務める。この前日には、官邸に豊響夫妻を招いて食事が行われており、時の総理もまたご多分に漏れず地元力士を最優先にしているのだ。

本来であれば相撲協会改革に一番影響力を発揮できるはずの政治家から、「公益法人人格を剝奪せよ」という声が上がらないのは必然なのだ。宗教法人と政治家のように、「持ちつ持たれつ」の関係が今後もズルズルと続いていく。（敬称略）



政治家が相撲協会の利権を守る

これをもっとも活用したのが、新党大地の代表で元衆院議員の鈴木宗男だ。鈴木は相撲協会理事長である八角親方（現役時代は保志、北勝海）の支援者として知られ、今回の問題でも後ろ盾となった。そもそも鈴木と八角のつきあいは四十年ほど前にまで遡る。鈴木が旧北海道第五区選出の自民党議員、中川一郎の秘書をしていた時代だ。中川は、北海道出身の北の富士が親方を務めていた九重部屋を応援していた。この部屋から出た昭和の大横綱、千代の富士の後援会名誉会長を中川が務めていたときに、入門したてだったのが保志だ。中川が死去した後、議員になった鈴木は、引き続き九重部屋